三十六年刊
阿部 邦彦

【はじめに】
どうも。
阿部邦彦です。
あなたがどうしてこんなものを読むことになったのかはわからないけれど、読んでもらえて嬉しいような恥ずかしいような、なんとも言えない気持ちです。

知らない人が読んで面白いのかどうかもわからないし、
知っている人に読まれたらどう思われるのかもわからないけれど、
たまたまいい機会が巡ってきたので、書いてみました。

資料らしい資料をひっくり返すわけでもなく、自分の記憶の中にある36年を書き綴っているので、どこかには、こんなことはなかった、勝手な思い込み、というようなこともあるかもしれません。
言っちゃまずいようなことは書いていないし、例え誰かが誇張表現だと思うようなことがあったとしても、私の中ではそういうものになっているのでそれはそれでいいんです。

これが私の中での36年です。

【誕生】
1977年7月13日。
北海道出身の父邦夫と、福岡県出身の母澄江の長男として生まれる。
体重2100グラムの手のひらサイズ。
未熟児としてのんびり病院で過ごし、有珠山の噴火とともに蘭越へ。

【九州住まい】
1歳下の妹が生まれる頃からしばらくの間、
福岡県北九州市小倉北区在住。
記憶にはない。

【初めての万引き】
九州に住んでいた頃。
近所のスーパーや商店に行っては、陳列棚や冷凍庫からお菓子やアイスを勝手に持ってくる困ったお子さまだった、と母に聞いた。
実家が商店をやっていたので、
「並んでいるものは勝手に持って行っても大丈夫」
という生活が幼いころから身についていたようだ。

【一人遊び】
小さい頃、両親が働いている店での私の遊びはかわいいもので、
「陳列棚に並んでいる商品を出しては並べなおす」
「レジの小銭を数える」
そんなのがお気に入りだったらしい。

【10円が入りそうなハゲ】
私の後頭部には貯金箱の口のように小銭が入れられそうな傷跡、ハゲがある。
保育園に通っていた頃、体育館によくあるボールの入ったかごに入り女の子と遊んでいた。そこから出ようとした時にガッシャーンと倒れてしまい、後頭部をザックリ流血。
リンゴやメロンを包んでいるようなネットを頭にかぶせられていた。
らしい。

【プール嫌い】
気がつけば、水が嫌いだった。
小学校のプール授業がとても嫌だった。
1 年生の時の担任にプールに投げ込まれてから、もっと嫌いになった。
水から上がってバスタオルを肩にかけたら蜂に刺された。
水に入らなくてもプールが嫌いになった。

【おっちゃん、ぶっちゃん、ばあちゃん】
小学校で初めて仲良くなったのは、近所の病院の息子、あだ名は「おっちゃん」。おじさん的なイントネーションじゃなくて、アクセントは「お」。
土曜日、学校から帰って家に遊びに行くと、必ずと言っていいほどトイレにこもってた。出てきたおっちゃんと一緒に、お昼ご飯は病院のまかないカレー。お腹いっぱいになったら、リハビリ室で枕を山積みにして遊んだり、ゲームをしたり。
病院の敷地内に小さな家があって、そこにはぶっちゃんとばあちゃんが住んでた。ぶっちゃんはブルドック。いつもばあちゃんと一緒。押入れに

は山積みのジャンプがあって、片っ端から読んでたな。
ばあちゃんとおっちゃんと兄ちゃん、４人で遊ぶときは百人一首。ばあちゃんが読んで、兄ちゃんVSおっちゃんと私。いつもケンカになっておっちゃんが泣かされてた。
こんな風にいつまでもずっと遊んでいられるんだと思っていたのに、お母さんと兄ちゃんとおっちゃんは引っ越しちゃって、いつのまにかばあちゃんもぶっちゃんもいなくなっていた。
山積みのジャンプがあったあの小さな家も、今はもうない。

【忘れられない味】
小学校から帰って、店に行くと、いつもそこにはじいちゃんがいた。
お腹がすいたらじいちゃんお手製の親子丼。
鶏肉と玉ねぎと玉子に醤油と砂糖のシンプルな味付け。
つゆだくが好き。
濃すぎるくらいに甘じょっぱいあの味が、大人になった今でも忘れられない。

【サッカー少年団】
新しい先生が来た。
サッカーのできる男の先生。
同級生が集まってサッカー少年団を作った。
先輩は一人もいない、友達だけのサッカー少年団。
サッカーが好きなわけじゃなかったけど、みんながいたからそこにいた。
試合も好きじゃなかったけど、練習で走っているのが好きだった。

【通学児童を拾う父】
じいちゃんばあちゃんの住んでる店とは別に、ちょっと離れた団地に住んでいた。歩くにはちょっと遠い、高学年になれば自転車通学ができる距離。
たまに父の運転するハイエースに乗って通学してた。
途中、1人2人と友達を見つけてはどんどん車に乗せていく父。
学校に着いてぞろぞろと車から降りていくのがなんだか面白かったな。

【マイナス30度の世界】
倶知安にある市場にたまに連れられて行っていた。
大きな大きな冷凍庫。
初めて体感するマイナス30度の世界。

【そしてまたいなくなった…】
あんなに仲が良かったのに、転校してしまったおっちゃん。
次に仲良くなったおっちゃんのいとこも転校してしまった。
その次に仲良くなった友達も、また転校してしまった。
仲良くなればなるほど寂しくなる。

【たまには家出】
たまに家出をしていた。
家を飛び出して、あてもなく歩く。
なにがそんなにイヤだったのかあまり覚えていないけど。
たまにふらっと家出した。

【平成を迎える】
同じ団地に住む阿部家。
大工のお父さんとお母さん。
妹の同級生と、その兄。
小渕さんが平成って掲げていたのを、自宅ではない阿部家で見ていた冬休み。
今でも蘭越に帰ると、幽泉閣のフロントで言葉を交わす、その兄。

【じいちゃん】
小さい頃はいつも一緒にいたじいちゃん。
時代劇を見ながらかりんとうを食べるのが好きだった。
ショートピースの煙が好きだった。
トランプ、オセロ、囲碁、将棋、チェス、花札、麻雀、チンチロリン。
いつもじいちゃんと遊んでた。
じいちゃんの横に乗って配達に行くと、いつも寄り道するラーメン屋。
しっぷいお茶が出てくる。
じいちゃんの友達が遊びに来ると、一緒に囲碁を打っていた。
バイオリン、マンドリン、ギター、ハーモニカ。
じいちゃんは色んな楽器を持っていた。
いつもふらふらしてて、仕事してるのか遊んでるのかわからないじいちゃんだけど、そんなじいちゃんが好きだった。
いつの頃からか体調を崩して入院していたじいちゃん。
札幌の病院に入院したり、倶知安の病院に入院したり。
いつから一緒に遊ばなくなったんだろう。
小学6年のお祭りの朝。

母に起こされて聞いたのは「おじいちゃんが亡くなった」。
お酒で肝臓を壊して、毎日缶ピースを開けるじいちゃんは、がんで亡くなった。
仏間に横たわるじいちゃんを見ても不思議と涙は出なかった。
焼かれてしまったじいちゃんの骨はもろく、小さくて、患っていたお腹のあたりは緑色の粉になっていた。
じいちゃんがいなくなってさみしいと気づいたのは何年も後のことだった。
もっと一緒に遊びたかった。一緒にお酒も飲みたかった。じいちゃん孝行したかった。
じいちゃん、会いたいよ。

【将来の夢】
卒業文集に「将来の夢」っていう欄があった。
パッと思い浮かぶような夢もなかったので、なんとなく「おもちゃ屋」と書いた。人を相手にする仕事に慣れ親しんでいたのと、ゲームが好きだったから。

【らんちゅう】
金魚の種類でもなければ、たまの曲でもありません。
蘭越中学校、略して「蘭中」。
蘭越、昆布、湯里、目名、田下、名駒、三和、御成、港と小学校は9校あったのに、中学校は1校だけ。
私の代はどこか1校いなかったはず。
蘭越駅の裏にある中学校の校舎はたまに見に行くんだけど、なかなか

面白い形をしてる。
単なる四角い箱じゃないところが好き。
教室が2階部分しかないところがあったり、体育館も半分宙に浮いてるし。

【成長】
中学入学時には前から数えた方が早い152cm。
2年になって170cmを超えて
このまま行けば180cmオーバーも夢じゃない！と思っていたら、175cmでぱったり止まりました。

【生徒会長になりました】
班長、委員長、生徒会長と色々な長をやったけど、どうしてやろうと思ったのか今でもわからない。
やりたがりだったけどやりたかったわけではないんだと思う。

【歌いたくない】
中学の音楽の先生はあだ名が「ジバン」。
授業の大半を前日の野球の話やどうでもいい面白話で埋め尽くし、最後の5分だけ歌って終わるというのがよくあった。円周率100ケタとか音楽と全然関係ないし。
その先生に「2オクターブ低い」と言われたのがトラウマで、未だに歌うのがイヤ。
小学生の頃から歌うのは敬遠してきたけれど、歌うどころか、自分の声が嫌いになった。

音楽の授業はもちろん合唱コンクールなんて論外なので、3年間指揮者をやるという徹底ぶり。

【白飯万歳】
多い時には1食で5合を食べていた。
それでいて体重は今よりも20kg近く少ないという細さ。
若さって素晴らしい。
その頃から使い続けている茶碗は普通の倍くらいのサイズ。

【いじめ】
中学の時、いじめの加害者になったことがある。
ちょっとふざけて遊んでいるつもりが、友達が学校に来なくなった時期があった。
加害者にその意識がないところが最悪。
あんなことは二度としたくない。

【自転車を買う】
小さい頃からマンガが好き。
パートさんが息子の読んでいた雑誌を定期的に持ってきてくれるのと、向かいにある本と文房具の店がじいちゃんの弟経営という、本には困らない環境で育ってきた。
ジャンプ、マガジン、サンデーに始まり、小学生の時に一番好きだったマンガ雑誌がチャンピオン。
自転車マンガ「シャカリキ」にはまり、小遣いを貯めてロードバイクを買うほどに。

自分の走るスピードと距離がわかるのが楽しくてひたすら走り続けてた。
その自転車は実家にまだあって、父がたまに乗ってるようだ。

【三国志】
友達の家でやったパソコン版「三国志」に始まり、ファミコン版「三国志」で友達と戦い、横山光輝「三国志」を20冊ずつ友達と3人でまとめ買い、吉川英治「三国志」で歴史小説にもはまった。
蜀、劉備、関羽が好きなのはその頃から変わりません。

【ぼくらの七日間戦争】
宮沢りえが初主演の映画「ぼくらの七日間戦争」。
その原作、宗田理の小説は私のバイブル的存在。
一緒に戦える仲間、学園モノ、そういうものが好きになったのはきっとここから。
シリーズを読み続ける中で、同じく宗田理好きなペンパルも増えた。

【胸さわぎの After School】
中学卒業の頃に一番印象に残っているのが、進研ゼミの CM で流れていたこの曲。
リンドバーグを本格的に好きになったきっかけ。
「あふれる好奇心」「小さな勇気で今を輝かせたい」「宝物になるきっと痛みも涙も」というフレーズはその後の自分の人生に少なからず影響していると思う。

【息抜きの合間の人生】
三国志とはまた違った意味でのバイブルがゆうきまさみの「究極超人あ～る」。
憧れの？高校生活、写真、生徒会、旅、自転車、私の好きなものが詰まっている。
私の座右の銘「息抜きの合間に人生」はこのマンガからの引用。

【勉強しない子】
小学校、中学校と授業を聞いていればなんとなく勉強は理解できて、学校以外では基本的には勉強しない。宿題は授業中に終わらせる。夏休み、冬休みの宿題はやらない。それでいてテストは9割平均くらい取れちゃうっていうダメなヤツ。塾にも通っていたけれど、ここでもなんとなくできちゃったし、友達と遊ぶのが楽しかった。
高校ってどうやって選ぶものなのか、調べたこともないし、考えてもいなかった。
成績いいんだから札幌の高校行ったら？と言われたかどうかも覚えていないけれど、テストで上位を争っていた友達はみんな小樽や札幌に出ていくと聞いて、それなら…と思ったんだろう。
それ以上に、小学校からずっと同じクラスだった女友達が受験のために札幌に引っ越した…というのが一番大きかったのかもしれない。うん、大きかったんだ。

【高校受験】
札幌の高校と言えば…東西南北。それくらいしか知らなかったんだ。調べもしなかったし。

南と西は私服だからパス。北と東ならいとこのいる東。
そんな安易な考えで高校を選んだのは私です。
男子校なんて行く気は全然なかったけど、一応札幌光星を滑り止めに。
そんなわけで受験日が近づいて、前日から母と2人で札幌へ。
友達に会いに行った母。
受験前日だというのに、買ってもらったエリア88（ワイド版）を読みふける私。
そしていよいよ受験当日を迎えるわけですが…
見事に寝坊。
母と2人、焦る焦る。
急いで高校に向かい、ギリギリ試験には間に合ったものの…昔から本番に弱いと定評のある私なので、
そりゃまぁ見事に緊張しまくりです。
寝坊しなかったら、緊張しなかったら、なんてのは言い訳。
どうして私立も共学にしなかったんだろう…と後悔しても遅いので、男子校に行くことになりました。

【卒業記念のマグカップ】
中学を卒業するときに、仲の良かった女友達からマグカップをもらった。
チキチキマシン猛レースのケンケンが笑ってる。
20年以上経った今でも一番大切なマグカップ。

【初めての引っ越し】
父が友人から借りた2トンの平台トラックに載せられた荷物と一緒に蘭越から札幌へ。

とある老夫婦の自宅2階の一室で私の札幌生活が始まった。
1学年上の野球部員以外は同級生が3人。
決しておいしいとは言えない食事は1階の狭い台所横のテーブルで。
洗濯機はコイン式。もちろんトイレは1つ。
2階の共同冷蔵庫は誰が入れたのかわからない海のモノのにおいでいつも臭い。
風呂がないので近所の銭湯へ。定休日の月曜は我慢。
老夫婦の寝室横に設置されたピンクの10円電話じゃのんびり電話もできないので、テレホンカード片手に公衆電話に通っては長電話。
銭湯帰り×公衆電話＝翌日風邪で学校休む。そんな方程式。

【下宿の悪イイ仲間たち】
悪ぶってた友達はストーブに灯油も入れられない。
一緒になって悪ぶってた友達は部屋ではドラムを叩き、兄ちゃんと仲が良かった。
真面目そうな友達は実は意外と悪ぶってて、ベッドの下にエロビデオ。
入学してすぐに、4人でカラオケに行ったり、パチンコに行ったり、飯を食ったり。
同じ美容室に通ったり、銭湯でのんびりしたり。
これといった出来事は思い出せないけれど、なんとなく楽しい1年だった。

【顔を変えました】
高校1年の春休み。学年末のテストが終わった直後に入院をした。
事故ったとか病気とかではなく、計画的な入院。

どうして入院したかっていうと、事の始まりは小学生時代まで遡る。
入学してすぐに歯科検診で反対咬合だと診断される。受け口。しゃくれアゴ。
顎が小さいらしく、歯並びも悪い。さらに舌っ足らず。
父の知り合いの家に行き、札幌の矯正歯科を紹介してもらう。
その後、定期的に札幌に通い、歯並びの矯正、顎の様子見、舌のトレーニング。
中学卒業まで月に1度は通っていたんじゃないかな。
母と一緒に歯医者へ行き、私が治療している間に母は買い物。
歯を磨く、口内チェック、型を取る、レントゲンを撮る、舌のトレーニングなどなど小一時間かけて歯医者を満喫。
終わったら丸井のおもちゃ売り場でプラプラするというのが定番。
顎の成長を抑制するのに変なかぶり物をかぶったり。
歯並びの矯正はよくあるギンギラの装置を歯に着けて、痛い思いをした。
初めてつけた日はうどんすら噛むのに激痛という試練。
しかも、食べ物で色がついてしまうので、カレーを食べるのは歯医者に行く数日前と決めていた。
高校に進学する頃には歯を7本も抜いただけあって、歯並びはそれなりに矯正された。
そして、ある程度成長の止まるのを見計らって、いよいよ顎の手術、というわけなのです。
テストが終わり、すぐに医大病院の口腔外科に入院。
検査やらなんやらで数日過ごし、全身麻酔で手術へと挑みます。
…と、気がつけば、上下のあごを固定され口が開かない上に、傷口か

らは2本のチューブ。
両腕に点滴をされて、しかも尿カテーテルという大層な姿でベッドに横たわっておりました。
顎の骨を切って動かしているので、顔はパンパンに腫れあがり、全体的にブニブニとした触感。
ぐるぐる巻きの包帯を取ると跡がついているくらいの気持ち悪さ。
口が閉じているので上手くしゃべれずにイライラ。
固形物が食べられないので、鼻からチューブ、ストローで流動食から始め、口を少しずつ開けていきながら3週間ほどかけてなんとかご飯が食べられるようになりました。
手術数日後に団子を持って見舞いに来る馬鹿な友達。自分で団子を食べて帰るのはいいけれど、余った団子を窓際に置きっぱなしで酸っぱい匂いを発するのは勘弁してほしかった。
退院後、右頬から口にかけての痺れだけが少しずつは減りながらも、２０年経った今でも残ってる。

【知らない教室】
春休みの入院期間が新学期に食い込んでしまい１週間ほど学校に行けなかった。
おかげで見知らぬ同級生の名前すら知らないまま、１回目の授業が全部わからないまま、ふわっと始まった高校2年。
とりあえず、入院してて学校に来られなかった、ということで病弱な看板が掲げられたので、その後何かあった時には都合よく使わせてもらいました。

【2回目の引っ越し】
札幌に来てから初めての引っ越し。
しかも妹と2人、円山の賃貸マンションで共同生活の始まり。
入院のおかげで自分の荷物は勝手に家族が大移動。
窓はあるけど見えるのはマンションの廊下。暗い。
居間のベランダから見える景色は…墓。
でも、いつでも風呂に入れるってだけで幸せ。

【入院2回目】
引っ越し2回目と同時期、前年手術した顎の再手術が決まっていた。
切った骨を固定するための金属プレート除去手術。
前回とは違って局部麻酔なので、手術中の先生方の会話が聞こえる。
っていうか、手術中なのに話しかけられる。
担当してくれた先生が2人とも光星出身の先輩。
雑談しながら手術は進み、話しかけられるたびに唸る。
手術が終わるとまた同じように口が開かない状態なので、唸る。
そして、退院する頃にはまたクラス替えで知らない教室。
さらに、また引っ越されていて知らない部屋。

【3回目の引っ越し】
私が3年になって受験シーズンが到来するのと、下の妹が中学入学なので、母も一緒に札幌へ。
円山の賃貸マンションを引き払い、山の手通り沿いの分譲マンション、新築。
前の家とは違ってベランダから外が見える。それだけで幸せ。

そのベランダから柵を乗り越えて遊びに来ていた友達の名はブブカ。

【逆単身赴任】
父だけを蘭越に残し家族4人は札幌。
店があるので仕方がない。

【化学部】
夏はサッカー少年団、冬は化学部の小中学校。
高校に入ってサッカーはやらなくなったけど、化学部の部室（実験室）で遊ぶ毎日。
エタノールをジュースで割って飲んだりしてないし、広い机でカードゲームなんかしてない。

【MTG】
マジック・ザ・ギャザリングというカードゲームがあった。
その当時はまだ日本語訳もされていなくて、辞書を片手にプレイ。
高校時代から数年かけて、少しずつ仲間も増えていった。
かけたお金は考えたくないけど、その分だけ得るものもあったと思う。
あの頃一緒にプレイしていた人たちが、今じゃ作り手にまわり日本語版を作っていたり、日本のトップランカーとして世界で闘っていたり。
好きこそものの上手なれ。継続は力なり。よくわかる。

【平均睡眠時間3時間】
高校に入ってからというものの、夜は本とゲーム漬け。
明け方に寝てギリギリに起きる、今とあまり変わらない生活。

【小樽通いでゲーム三昧】
教師の父の転勤で中学の時に小樽から引っ越してきた友達。進学したのは小樽の高校。
両親は蘭越在住なので、二世帯住宅に一人暮らし。
休みになるたびに集まるゲーム仲間。
セガサターンで格ゲー。３人でも４人でも麻雀、もちろん脱がない。１部屋分全部マンガ。単発でもキャンペーンでもTRPG。食べる間も、寝る間も惜しんで遊び倒す。
ひどい時には１週間泊まり込みで、４日徹夜で５日目にトイレで5時間寝落ちして、ドアノブを壊して救出された後にまた一晩徹夜とか。水分補給とインスタントラーメン３食で過ごしたら7kg痩せた。自分でもびっくり。

【負の遺産】
高校時代に小樽で生み出されたモノたち。
１.「修学旅行のしおり」
小樽一泊ほぼ徹夜で作り上げ、JR 最終で帰宅しようとするも寝ぼけて手前の駅で降りてしまい徒歩で帰宅。深夜のコンビニでコピー。ホチキス止めで完成したのが修学旅行出発数時間前。内容的にはほぼ究極超人あ～るのパクリ。手元に現存せず。
２.「イロモノ戦隊ゲテモンジャー」
仲間内で脚本を書き上げ、マイク一本で録音したラジオドラマ風のカセットテープ。設定上女性だったブルー役を演じた。この頃にはすでに青が好きだったと思われる。

3.「世界征服」(っていうタイトルだったはず)
マンガ、小説などミックスした同人誌。基本的にはファンタジー寄り。私は絵も文章も書かずに編集、入稿などの裏方作業。テイセンボウルでコミケにも参加。とにかく恥ずかしくて人様には見せられません。

【複雑な関係】
隣町出身の友達に彼女がいた。。
高校の屋上から見える近所の女子高生。
その前の彼女はその友達。
4人でよく遊んでいたんだけど、気がつけば複雑なことになっていた。
何もしていないのにな。
気がつけば3人ともいなくなってた。

【高校生クイズ】
今でも続いている高校生クイズ。
高校生活の記念に学校の友達と3人で申し込んだ。
大会2日前、迷彩服姿で友達と2人、自転車で走る。
例年、会場に並んだ先頭3組が紹介されるというので、そこだけでも目立とうと早くからの会場入り。
会場まで行く途中、背中のザックに傘を差していた友達が、電柱と塀の間に挟まって宙を舞ったりしたものの、特にケガもなく真駒内公園に到着。
普通に公園で遊んでいる人以外、それらしい人は見当たらない。
予定通り1番乗りか、とほくそ笑む2人。
芝生に寝転び、何をしていたか覚えていないけど、なんとなく1日を過ご

した。
翌日、会場にスタッフらしき人が現れて、1番に並んでたら取材するからね、と言われたのに、それは実現しなかった。
野宿生活で体力を消耗したのか、前日早めに眠ってしまい、起きたらすでに2組並んでる…
結局3番目になってしまい、それでも軍服と迷彩服ってことでオープニング映像でほふく前進。
いい思い出。

【高校卒業】
正直、卒業式とか何も覚えてない。

【大学受験】
高校受験と同じく、やりたいことがあるわけでもなく、どこにしようか全然考えてなかった。
あの子が行くという大学を私も受けてみた。
学祭が楽しかったから北大も受けようと思ってセンター試験。
うん、浪人だね。

【バイト先は家から徒歩1分】
浪人時代、ゲーム漬けの毎日を過ごすためにお金が必要だった。
思い立ってバイト先に選んだのは自宅マンションから徒歩1分のコンビニ。
すぐ裏のアパートに住む若めの店長。ちょっと頼りない感じだけど、店長は店長。

同じ時間帯で働くのは少し年上の感じのいいお兄さん。同じオーナーの別店舗と掛け持ちをする頑張り屋さん。夜の時間帯は私と店長と3人で回してた。
夕方私と交代するのは女子高生2人。マジメな感じのおとなしい子Nと、ギャルっぽい感じの明るい女の子M。
基本的には週3日くらいのシフトだったのが、急に誰かが来れないとか、店長が用事とか、何かあるたびに呼ばれては5分以内に出勤できるという重宝されていたのかもしれない。
深夜にしては時給も安かったけど、微妙な位置にあったからなのか、深夜帯に客が一人も来ないことがあるくらい暇だった。
そんな少ないお客さんの中でも常連さんってのはいるもので、毎日同じ時間帯に同じ煙草を買いに来るお兄さん。近所の病院から毎朝通ってくるおじさん。定期的に万引きしようとする小僧などなど。
そんな懐かしい場所も、気づけば空き店舗になり、変なお店になって、建物が無くなったと思ったら今では動物病院。
そういえば、私の古内東子ファーストアルバム1枚目はMに貸したまま返ってこなかった。今でも聴いてくれてるといいな。

【10分1000円】
近年になってゲーセンでも見かけることがあるコックピット型の筐体だけど、私たちは高校時代から遊んでいた。もう20年近くも前に。
札幌駅高架下のゲーセン「アミュージアム」にあったそれは10分間1000円というとんでもない料金にも関わらず、私達パイロットの心を鷲掴みにしやがって、開店とともに通っては訓練の毎日を送っておりました。
特に浪人時代は、家で過ごすよりゲーセンで過ごすことの方が多かっ

たんじゃないかな。
毎朝予備校に通っては出席カードを通し、隣の「レタス702」でゲーム。
アミュージアムの開店とともに移動して、飯を食うのもゲーセン内。
バイトがなければ閉店まで居座り続け、帰宅しても朝までゲームという狂いっぷり。
こんな毎日を送っていても、なんとか大学には入れました。

【初めての職務質問】
クリスマスも近づいた雪の降り積もる札幌駅近郊。
私と男友達2人はうずくまり、必死に腕を動かしていた。
3人で頭を突き合わせ何かを覗き込みながら、ウー、アーと唸りつつ。
そこに警察官のお兄さんが近づいてきて声をかけた。
「キミたち、ちょっと、何してるの？」
真顔で答える私たち3人の答えはこうだ。
「生クリーム泡立ててます」
警察官の苦笑い。
アミュージアムの仲間たちでクリスマスを祝おうということになった。
スポンジケーキを家で焼いて持って行った。
デコレーションのためにボウルと泡だて器と生クリームをエスタで購入。
冷やしながら泡立てるためには雪の中。
3人で交代しながら泡立てていた結果がこれ。

【泥だらけの対戦】
アミュージアムのスタッフがサッカーチームを作っていた。
ある時、「スタッフチームに勝てば1日貸切」という話になり、早速常連で

チームを作り対戦。
対戦は店が始まる前の早朝。前日からの雨はやんだものの、グラウンドはドロドロのぬかるみ。
定期的に練習もしているスタッフチーム１１人vsゲームばっかりで運動をあまりしていない常連チーム１３人というハンデつき。
前半、勢いに任せて１点をもぎ取った常連チームが逃げ切るか、と思われたのも儚い夢で、終わってみれば１対３で完敗。負けたのは悔しかったけど、みんなでドロドロになりながら走り回ったのは楽しい思い出。

【セーラー服でゲーム】
サッカー対戦の裏には罰ゲームが待っていて、
「セーラー服でゲーセンの店内清掃」
というオモシロ恥ずかしい試練。
私を含む４人の男が女友達に借りたセーラー服に腕を通す。
実際に掃除をしたかどうかは覚えていないけれど、４人の男がセーラー服姿でゲームをしている姿は、写真で見ても面白かった。

【短期バイト】
大学入学前の１カ月、引っ越し屋でバイトをした。登録制の日雇い。
朝、琴似の集合場所からバスに乗り、詰所へと向かう。
そこで待っていると、仕事を割り振られたベテランのおじさま達が必要な人数をスカウトしていく。１本目の仕事が終わり、詰所に戻ると時間次第では２本目の仕事が入る。そうして何度かバイトに入っていると馴染みのベテランさんができて、優先的に仕事に呼ばれるようになる。
何度もバイトに行っていた中で一番楽だったのが、コピー機１台を浦河

まで運ぶお仕事。おじさま2人とトラックに乗り、コピー機をクレーンで積み込み数時間。現地に着いたらクレーンでコピー機を下ろし、指定された場所まで押して行って完了。
私がやったことと言えば、下ろしたコピー機を押したくらいで、行きも帰りものんびりでした。
これで1日6千円。

【大学入学】
大学に入っても、クラス的なものがあるんだと知った。
同じクラスに引越し屋のバイトで一緒だった奴がいた。
自己紹介でさやかという名前が5人くらいいて気持ち悪かった。

【狙うのが好きです】
大学に入ってやりたかった部活が、弓道、アーチェリー、射撃。
私の大学には弓道部と射撃部。
とりあえず見学してみよう、と思って射撃部の部室に行くと、そこには見知った顔。高校時代にバカをやっていた友達の1人がそこにいた。
結局、部活の人数が多い弓道部は敬遠して、知り合いのいる射撃部に入部。

【能力給の魅力】
大学に入ってすぐにバイトを始めた。
夕方から数時間のデータ入力。ひたすらキーボードを打つ。週6日。
より速く、より正確に打てば打つほど時給が上がるのが楽しかった。
自分の働きが数字で見えるのがいい。

半年でサブリーダー。その先はリーダーで4年間。
たくさんの人達に囲まれながら楽しく働いたなぁ。

【化学の実験】
経済学部経営学科だったけど、なぜか化学の実験があった。
４人ずつのグループに分かれて、数回の実験結果が目標の範囲内であれば終了。終わったグループから解散、というシステム。
私を含めテキトーな人間ばかりだったのか、なぜか私たちのグループはいつも時間いっぱいまでどうにもうまくいかない。
その結果、講義終わりに先生に連れられて飲みに行く、ということが多くなった。
そしてうれしいことに、毎回のお会計は先生持ちというご褒美つき。
3次会で場末のスナックに連れて行ってもらい、なぜか隣に座っていたお姉さまと一緒にタクシーで帰ったのはいい思い出。

【ハロウィンで単位をもらう】
大学1年の英語の授業。
普通の講義を聞いているのはなんだかめんどくさい気がして、少人数のクラスを選択。シチュエーション別の実践的な会話が中心で、グループワークが多くなった。
その年のハロウィン。先生の受け持つクラスの学生が集まってパーティがあり、参加するには全員仮装必須。かぼちゃランタンを作ってコンテスト。
昔からバカなことには真剣になってしまう性質で、ここでも変な本気。
前日から同じクラスの３人と材料を集め、パーツを作り、胴体、帽子、槍、

靴と、徹夜で4人分のトランプの兵隊を完成。
さらにチーム対抗で行われたかぼちゃランタンコンテストでも見事に優勝！そのおかげかどうかはわからないけれど、授業の内容は振るわなかったものの、しっかり単位はいただけました。

【青春18きっぷでゲーム遠征】
ネットゲームで知り合った仲間が静岡の友人宅に集まることになった。
滞在する期間だけが決められて、その間であればいつ行くのも、どうやって行くのも自由。現地集合、現地解散。
私は青春18きっぷで陸路をのんびり行くことを選んだ。
札幌駅発の夜行列車に乗って、まずは函館まで。
朝の函館で友達と会い、のんびりする間もなく本州へと渡る。
道中、同じ列車に乗っていた兄ちゃんと仲良くなって、八戸経由で仙台まで道連れ。
仙台では浪人時代のゲーム仲間の部屋へ。
翌日は仙台城址、ずんだもち、牛タンを堪能していざ関東へ。
東京へ着いたのは深夜。ネットゲーム仲間の家へ転がり込む。
翌日、先にバイクタンデムで静岡入りした友達から「九段下でゲーム買って来てくれ」と言われ、自分好みで数点のゲームを買っていく。
南国のような景色を眺めながら伊東の駅に降り立つと、知ってる顔と知らない顔が一緒にいた。
迎えに来てくれたのは、某料理マンガ家のお姉さま。
印税で建てたという噂のお宅へお邪魔いたします。
それからの1週間は夢のような毎日でした。
目が覚めてはゲーム三昧。毎食おいしい料理が食べられる。年齢職業

性別と全然バラバラなのにみんなバカばっかで楽しすぎる。
おもてなしされ過ぎてせめて食費をと思ったのに、頑なにお金を受け取ってくれなかったので、プレステの中に札束ぶっこんで帰ってきました。
オンラインの世界からリアルに繋がるあの感覚を、いまだに忘れられずに生きています。

【初めての彼女】
大学2年、20歳。
初めて彼女ができました。
誕生日が1週間しか違わないAB型の彼女。
身長も3cm位しか違わない部活の後輩。
同じライフルを持って一緒にインカレにも行った。
よく食べた。とにかく2人ともよく食べた。
なんだかんだといろいろあったね。
それから3年以上付き合っていたけれど、別れの時。
2人でよく通っていた暖中で泣きながら別れ話をされたのを覚えてる。
顔見知りの店員さんに「阿部さんが悪い」と言われながら。
母や妹とあんなに馴染んでいた子は珍しい。

【母とソファを拾う】
自動車学校へ通っていた夏。
ある朝、母の車で自動車学校へ向かおうとすると、通りがかったゴミステーションにいい感じの2人掛けと1人掛けのソファ2脚が置いてあった。
もったいないなぁ…と思ってそのまま車に積み込んで自宅へ持ち帰る母息子。

こないだ実家に帰った時にもまだあったな、あのソファ。

【年越しゲーム】
20代前半、年末年始は蘭越に帰らず、誰かの家でゲーム年越しというのが定番だった。誰かの家に集まり、新作やら旧作やら、年末の数日間をボードゲーム漬けで過ごす。
ある年、「年越しゲームで負けたら罰ゲーム」というルールが設けられ、全員の目つきが変わる。とにかく負けたくない。なにをやらされるかわからない。
この年、上半身裸でスノーエンジェルを作ったのは、その家の主。

【オリンピック選手と合宿】
夏に北海道で合宿をするオリンピック選手の自衛隊員の皆さま。
大学2年くらいから合宿に参加させてもらうようになった。
お昼ご飯は自衛隊の缶詰。
ミニゲームで対戦をして、勝ったら賞品とか。
世界は遠くないって思ってた。
なんとなくオリンピックを目指してた。

【インカレ】
インカレの全国大会は関東と関西の持ち回りで会場が変わる。
私が行ったのは伊勢原と能勢。
行けなかった2年間は朝霞と広島。
全国言ったらやっぱりレベルが高いよ。
北海道でトップとか取っても、井の中の蛙。

【初めての東北遠征】
北海学園大学vs東北学院大学の定期戦。
仙台と札幌の持ち回り。
１年目、札幌。
覚えているのは、すすきのにある代々御用達のホテルライン。
飲み会で酔いつぶれ、翌日先輩に「次やったら退部」宣言されたこと。
２年目、東北。
フェリーに乗って初めての東北遠征。
深夜の甲板で学生歌の練習。
徹夜のフェリーで朝日を拝む。
体育館ステージ下の射撃場。
毎年恒例の裏定期戦ボウリング。
飲み会は魚民。鍋蓋で酒。
酔って迷子になった後輩を探しに警察署まで行って、同じような酔っ払いとケンカ。
またしても酔いつぶれ、「次やったら退部」宣言アゲイン。
二日酔いの松島。遊覧船なんて乗れるわけない。
松島水族館、ペンギン。
ランチは牛タン。
二本松射撃場。
国体選手を有する東北学院に完敗。
帰りは仙台空港からビューン。
３年目、札幌。
小樽に行ったっけ？くらいしか覚えてない。

4年目、仙台。
行った覚えがない。
今では個人的な交流は全然なくなってしまったけれど、東北のみんなは元気にしてるのかな、久しぶりに会いたい。

【免許】
1999年、平成11年の夏。
車の免許を取った。
まだ地上にあった頃の桑園自動車学校。

【スクーター】
免許を取った私に、バイト仲間がスクーターを譲ってくれた。
初めて乗ったスクーターで家まで帰るのは命がけ。
それから何年も私を運んでくれた愛車。
毎日毎日、大学、バイト、部活と走り回った。
ライフル2丁を担いで射撃場までの坂道。
彼女の誕生日を忘れて、夜中の36号線を雨の中走った。
バイク乗りの友達と一緒に蘭越までドライブ。
タイヤがすり減ってバーストするまで乗り続けた。

【23歳の誕生日】
大学4年の夏。
23歳の誕生日に大学を辞めた。
部活とバイトとゲームだらけの大学生活だった。

【4回目の引っ越し】
母は蘭越へ帰って行った。
妹と3人で琴似に引っ越し。
3LDK駐車場付きで7万円。地下鉄まで3分の好立地。
ここで過ごしている間に色々なことがあったなぁ…

【昼間の仕事をしよう】
夜のバイトと並行して昼間の仕事を探してた。
特にこれといったものはなかったんだけど、パソコン使う仕事がいいなぁ、っていうくらい。
受けに行った小さな印刷会社で、ちょっと若めの専務が面接。
履歴書を見て一言。
「〇〇って知ってる？」
と、高校で隣のクラスにいた男の名前を出す。
何度か授業が一緒になったことがあったっけ。
「あいつ、オレの弟」
この時、就職が決まったんだと思う。
世界は狭い。

【さらばアミュージアム】
２００２年３月２４日。
７年間通い続けたみんなの故郷、アミュージアム閉店。
どんだけお金を使ったかわからないけれど、それ以上に思い出がたくさん詰まった場所。
閉店するから持ってけーってことでアストロ筐体１台、RVRに積んで帰

った。
車がカーブに差し掛かるたび、つぶされそうになりながら。

【バイクに乗りたい】
2002年、夏。
バイクの免許を取った。中免。
四輪よりも二輪が好き。

【初めてのバイク】
友達に紹介されたバイク屋で初めてバイクを買った。
中古だけど、後姿が気に入ったHONDAのSPADA（黒）。
何故か横浜ナンバーだった。

【事故った】
2003年9月4日。
会社からバイクで帰る途中、わき道から飛び出してきた車。
スローモーションになり、意識が飛び、気がつくと道路に寝ていた。
周りでざわざわしている声。
遠くから聞こえる救急車の音。
意識はしっかりあったんだけど、怖くて目を開けられなかった。

【帰宅する】
運び込まれた病院で検査。
母に電話をすると笑っていた「バカだねぇ」って。
左手の骨折が見つかった。

それ以外は翌日のMRI検査待ち。
とりあえず帰っていいらしいので、妹に迎えに来てもらった。
事故現場を通ると、前輪とハンドルがグシャグシャになった愛車。
道路にはオイルの跡。
帰宅して、何人かに連絡をした後、痛みに何度か目が覚めながらも寝ることができた。

【検査結果】
混み混みの病院で2時間の検査待ち。
MRIを撮った結果。
・左手手根骨骨折
・左膝内側側副靭帯損傷
ってなことらしい。
手術が必要で入院しなきゃならないから、また明日手続きに来てね、ってことで事故後2日目も帰宅した。

【入院生活】
当時住んでいたマンション。
道路を挟んで真向かいにあった病院。
離れた病院に入院するのはちょっとな、と思って転院。
再検査の上で即入院となった。
首にはコルセット、首が長くて2枚重ね。
左手にはギブス。
左足は手術まで固定するだけ。
手術までは検査とのんびりな毎日。

付き合って3ヶ月しか経っていない彼女が毎日お見舞いに来てくれた。
全身麻酔前の浣腸はマジで我慢できない。
気づけばベッドの上、というのを体感した。
手術後はギブスが外れるまで初めての車イス生活。
片手片足でも自由に動けるようになった。
ギブスが外れてリハビリ生活。
左手左足が思うように動かないもどかしさ。
右半身だけがどんどん鍛えられていく。
同室の人は何人も入れ替わった。
彼女と2人で入院当日から同室のおじさんの還暦を祝った。
たくさんの友達、知り合いがお見舞いに来てくれた。
とにかく本を読みまくった。
琴似から豊平川の花火が見えるのを知った。
妹には毎日お世話になった。
看護師さんと仲良し。
車イスから松葉杖になって、退院。
たった1本道路を渡るだけの自宅が遠かった。
気がつけば、事故から53日が経っていた。

【病院通い】
退院したのが10月末。
それから3月までは週6日のリハビリ。
仕事にはまだ復帰できず。
本当はまだ入院だったのを、家が近いから退院させてもらったから。
退院しても毎日病院にいる生活。

【社会復帰】
春。
週３日のリハビリを続けながら会社に復帰した。
事故ってみんなに迷惑をかけたけど、暖かく迎えてくれた。
ただいま。

【mixi始めました】
２００４年１１月。
ずっと招待してくれる人を探していたmixi。
会社の先輩が隣の席でやってた。
この出会いのおかげでまた人生が楽しくなった。

【妹の結婚】
３月３日に入籍した妹。
それを知ったのがGWだった兄。

【5回目の引っ越し】
２００５年４月。
琴似→西２８丁目。
妹が実家に帰り、初めての１人暮らし。
木造2階建てのアパート。
歩いて3歩の向かいの部屋に彼女が住んでいた。
冬にはシャワーが凍るくらい寒い部屋だった。

【2台目の原付】
2005年6月。
友人からもらったSUZUKIのK50。
速くないし、小回りはきかないし、ちょっとボロかったけど、そんな癖のある感じが自分で似合ってると思った。

【初めてのmixiオフ会】
深夜0時を過ぎてからの3次会に参加。
たった4人の集まりだったけど、思い出深い出会いだった。

【やっぱ31でしょ】
アイスといえば31
ラムレーズンが好き。
多い時には週に3日食べていた。

【山の上にも3年】
2005年8月。
3年11ヶ月勤めた会社を退職。
版下作成、校正とか印刷の細かい仕事から、ホテルへの営業、ブライダルの現場まで、色々なことをやってきたなぁ。
黄色い鉛筆を持ってひたすら版下と格闘したり、印刷機、断裁機、紙折り機の使い方も教わった。
紙の数え方、さばき方は今でも役立ってる。
Macやイラストレーターを触るようになったのもここから。
マックスアートは今でも使うことがある。

大量のキャンドルと過ごした日もあった。
バイクで事故ってから復帰まで色々迷惑かけたけど、たくさんの人に本当にお世話になった。
厳しくも可愛がってくれる先輩たちに囲まれ、パートのお姉さまたちにもかわいがってもらい、最後に花束をもらった時には正直涙が出た。
仕事が大変な時もあったけど、居心地のいい職場だったなぁ。

【子だくさん】
私のことをと一さん、パパ、と呼んでくれる子たちがいっぱいいた。
少なくとも5男5女くらいはいたんじゃないかな？
怪しい関係ではありません。

【シャワーを浴びにジムまで】
朝起きてジム通い。
マシントレーニング、プール、ベンチプレス。
昼からすすきのまで歩いて出勤。
深夜まで仕事をして歩いて帰る毎日。
その繰り返し。
いつの間にかマラソンも走っていた。

【名残惜しい飲食業界】
２００６年４月。
ほんとにほんとに楽しかったタスコシステムでの飲食業界。
１年という短い間だったけど、やっぱりやってよかった。
バイトから初め、準社員になり、正社員になって人生初の入社式。

年齢も性別もバラバラな仲間たちと、色々な店でがんばった。
すすきのの交差点で客引き。
スーツで勉強会。
怒涛の宴会ラッシュを乗り越えて、スタッフみんなで深夜の打ち上げ。
どれだけ徹夜をしたか、何度立ったまま寝たか、店で過ごした時間はどれくらいだろう。
今ではもう、会社も店も、なにも残ってはいないけれど、毎日通っていたあのビルを見るたびに、楽しかった思い出が蘇る。

【レッツ出会い】
同い年コミュで知り合った友達にセパタクローに誘われた。
試しに参加してみる。
練習場所はレッツポプラという若者活動センター。
そいえば、家の近所にレッツ円山ってあったな。
それが激動の１年の始まりだった。

【役者になりました】
演劇サークルに入った。
入ったばかりなのに翌月には公演が決まってた。
何もかもが初めてのことだったけれど、何もかもが楽しかった。
１人で台本を読んでいる時も、誰かと一緒に稽古する時も、舞台を作ったり、みんなでご飯を食べるだけでも、そんな空間が好きだった。
初めての舞台、小さな会場の半分は自分の友達で埋まってて、恥ずかしかったけど、すげー嬉しかった。
でも、自分の演じてる映像はやっぱり見たくない。

【カメラ借りました】
写真サークルに入った。
手作りだけどちゃんとした暗室があって、モノクロ写真が手焼きできる。
友達に借りたカメラ片手に色々なところに撮りに行ったなぁ。
街の風景が好き。
夜の光がとても好き。

【ウクレレ借りました】
ウクレレサークルに入った。
ギターを弾くのはあきらめて、ウクレレをやろうと思った。
のんべぇ友達がかわいい青いウクレレを貸してくれた。
少しずつ練習して、人に聴かせられたらいいなって思ってた。
歌うのは好きじゃないけど、楽器ならなんとかなりそうな気がする。

【空き巣に入られた】
家に帰っても寝るだけの生活が続いていた。
ある日、ふと気がついた。
家の中のものが何か足りない。
調べてみると、ウクレレ、時計、スキーウェア、ゲーム一式などなど、細かいものが色々となくなっていた。
いつのまに？
とりあえず警察を呼んでみた。

【生きるってこと】

「生きるってことは、自分の中の、死んでいくものを、くいとめるってこったよ。気をゆるしゃあ、魂もすぐ死んで行く。筋肉もほろんで行く。脳髄もおとろえる。何かを感じる力、人の不幸に涙を流す、なんてェ力もおとろえちまう。それを、あの手この手をつかって、くいとめることよ。それが生きるってことよ」
って誰かが言ってた。
生まれた瞬間から何もしなければ坂道を転がり落ちるだけなんだね。

【書き置き】
起きた時に部屋の中に違和感。
いつもと同じ部屋のはずなのに、なんだか違う景色。
テーブルの上には書き置きとおそろいのストラップ。
「好きに生きてください」

【30歳になった】
2007年7月。とうとう30歳になった。
遊びまくった夏。
楽しかった夏。
モテたっぽい夏。

【OYOYO】
暗室が使えなくなる日が迫っていた。
どこか次の居場所を探そうと、たまたま誘われた場所があった。
いろんな大人が集まって、放課後を楽しむ場所。
暗室を含めたその場所を自分たちで作っていく。

その場所の名前が「OYOYO」。
リノベーション初日。
たまたまエレベーターに乗り合わせた建築士のサカイさんと、あのドアを開けた瞬間から私の中でのOYOYO生活の始まり。
初めて訪れた雑居ビルの一室で撮ったガラクタだらけの1枚の写真。
そこからは想像できないくらい色々なことがやってきた。
OYOYOは今でもそこにある。

【街創造スタッフ】
レッツ円山でお世話になった職員さんから誘われた。
「だいどんでんっていうお祭りの運営スタッフをやっているんですけど、女の子ばかりで男が少ないんで、あべさん来ませんか？」と。
別に女の子が目的とかではなくて、イベントを作ったり裏方が好きだったから、ちょっと気になって行ってみた。
あれから6年。
たくさんの仲間たちが卒業していったけれど、私はまだここにいる。

【オランダへ】
2009年2月8日（日）。
モエレ沼で友人の結婚式のお手伝い＆写真撮影。
ガラスのピラミッドで手作りの結婚式はすげー楽しかった。
と、結婚式の余韻に浸りつつ、OYOYO でやっている雪まつり関連の打ち上げにちょいと顔出し。
「あべくん、ちょうどいいところに来た」
と、オランダから来ていたアーティスト（Kamiel Verschuren）を紹介され

たと思ったら、その方が…
「この作品欲しいんだけど、いくら？」
と英語で言ってるわけですよ。
ちょうどその期間に写真展をやっていて、目の前には私の作品。
通訳してもらいつつ話を聞くと、
「オランダにはスクランブル交差点がなくて、日本に来た時に気に入って写真を撮ったんだけど、あんまりいい感じに撮れなくて、この作品の感じがいいから欲しいのさ」
ってなことらしい。
ドギマギする私に仲介役の人を挟み、展示品はちょっとキズがあるので、焼き直した作品をお譲りすることに。
本人はもうオランダに帰るので、翌日オランダに行く方に預ける約束。
初めて売れただけでも驚きなのに、それがオランダに。
そんな驚きの気分のまま行った古内東子のディナーショーはまた格別。
ずっと背中しか見えなかったけど…

【神輿】
大通、四番街、祭好会。
神輿を担ぐ大人の集まり。
肩が上がらなくなるほど辛いけれど、街を渡御するあの雰囲気が好き。
お酒を飲みながらみんなで歩く街が好き。
神輿を上げる瞬間の一本締めが大好き。
あぁ…いいなぁ…って身震いする。

【だい・どん・でん！】

さっぽろパフォーマンスカーニバル。
街創造スタッフが企画・運営をしているお祭り。
商店街のまちの人、学生、社会人、パフォーマー、色々な人が集まって、
大通のホコテンを賑やかす。
書類に目を通す、電話をする、会議、作業。
家に帰ってもネットで会話をしながら明け方までデスクワーク。
そんな苦しそうな毎日が楽しくて仕方ない。
当日、パフォーマンスをほとんど見ることなく、トラブルがあれば呼ばれて走る、電話を受け、無線を取り、機材を担いでとにかく動く。
お客さんやパフォーマーとは違うスタッフの楽しみ。
自分が何かをすることで、誰かが喜ぶ、幸せになれるって、楽しい。

【ヘルニア】
ある年のだいどんでん。
機材やパイプ椅子を担いで走り回っていた。
打ち上げの会場で座っているのもつらくなった。
翌朝起きて、起き上がれなかった。
病院に行って検査した結果は椎間板ヘルニア。
お神輿もマラソンもしばらくはおあずけ。
歩けない、座れない、とにかく腰を曲げるのがつらい。
頑張って寝てみても、痛くて眠れない。
起き上がろうとしたら立ち上がるまでに30分以上かかる。
靴下が履けない。
薬とコルセットでなんとか生活していたけれど、職場で椅子に座れないので、段ボールで底上げした簡易スタンディングデスク。

少しずつ良くなって、普通に生活できるようにはなったけど、重たいものを持ったり、激しい運動をするとヤバい。
仲良く付き合っていこう。

【6回目の引っ越し】
2009年4月。西28丁目→北34条。
蘭越に帰っていた妹がまた札幌に出てくるというので家探し。
見つけたのは地下鉄まで徒歩3分のデザイナーズマンション。
2LDKで60平米以上というゆったり空間。
ゆったり足を伸ばせる風呂にウォークインクローゼットが妹の決め手だったらしい。
新しく大きな冷蔵庫。これでいっぱい料理ができる。
札幌に引っ越してから15年以上使っていた洗濯機が水漏れ。
マンションの廊下まで水浸しにしてとうとう買い換えた。
家に帰ればご飯とお風呂が待っている。
居間は間接照明のみで夜はいつも薄暗い。
そんな妹との生活は質素につつましく…1年も経たずに終わりを迎えたのです。

【妹の彼氏】
たまに遊びに来ていた妹の彼氏。
おかえりなさい、と言われるのは別にいいんだけど、ちょっとしただらしなさが玉にキズ。
食べたものを置きっぱなし。
使ったタオルを置きっぱなし。

ドライヤーはコンセントに刺さったまま。
などなど、気になるところは数えきれないくらいあったけれど、そんな彼の就職が決まり、一緒に東京へ行くことにした妹。
再同居1年も経たずして、嫁に行くことが決まった妹。
ちょっとだらしないと思っていた妹の彼氏が、弟になった。

【かっぱウィーク】
シルバーウィークと呼ばれる秋の大型連休があった。
だいどんでんを一緒に過ごしたスタッフ数名と、定山渓のかっぱウィークというイベントに裏方参戦。
4泊5日、1日3食付、交通費支給という夢のような生活。
考え方によっては近場の温泉に小旅行。のんびり満喫。
毎日早起きして朝ご飯まで散歩。
あちらこちらに猫とかっぱが待ち受ける。
イベントが始まるとステージ出演のパフォーマーさんのお手伝い。
正直、あまりやることがない。
お昼は食券をもらって、屋台や近所のお店で好きなものを食べる。
夕方、日も暮れないうちにイベント終了。
散歩しながらのんびり宿に戻る。
晩ごはんは美味しく豪勢で、毎日5杯はおかわりしてた。
大きなお風呂に入ってのんびり。
夜の道を散歩して、草むらに寝転がり、満点の星空を眺めた。
川にかかった小さな橋の真ん中にリュックがポツンと置かれていて、飛び降り自殺！？という恐怖も味わった。
ずっと一緒にいた街スタ同期の女の子と「付き合ってるんですか？」と

疑われるくらい楽しく一緒に過ごした5日間。
今までで最高にのんびりできたスタッフ生活。

【最後のバレンタイン】
会社のデスクを整理していたら、妹からもらったバレンタインチョコの空箱が出てきた。
2人とも結婚してしまって、もう一緒に住むことはないだろうから、チョコをもらうこともうないのかもしれないな。
そんな風に思ったら、単なる空箱のはずなのになぜだか捨てる気になれなかった。
ちょっとさみしい。

【7回目の引っ越し】
2010年3月。北34条→北34条。一人暮らし。
それなりに家賃の高い部屋だったので、さすがに1人で居座るつもりもなく、琴似を中心に新居を探すもいい物件が見つからない。
最終的には初期費用が安い、新しいということで300m位しか離れていないマンションに引っ越した。
地道に歩いて荷物を運ぶ毎日。

【義弟のバイク】
札幌にいた頃バイクに乗っていた、というのを出張で我が家に泊まった義弟に聞いた。
前に住んでたマンションに置いてたけれど、まだあるかな？と、あるかどうかわからないくらい放置されていた。

確認しに行くと、２年経ってもまだそこにいたバイク。
義弟と相談して、メンテナンスに出し、預かるという名目で再びバイクに乗り始めた。
死にかけたあの事故から１０年近く経った。

【8回目の引っ越し】
ふと気づいたことがある。
高校入学とともに札幌に引っ越して２０年。
住んだ家はこれまでに7ヶ所。
でもね、自分の意志で引っ越したことが一度もない。
親の探した下宿。
妹との同居。
妹と母との逆単身赴任。
母帰る。
妹帰る。
妹来る。
妹結婚。
そして、初めて自分の意志で引っ越しをした。

【青年団】
札幌市青年団体協議会。略して札青協。
立ち上げからそこにいるけれど、ただいるだけ感が強い。
イベントだったり、総会だったり、何かある時の参加。
でもこれからはもう少しちゃんと関わっていきたいな。
色々な地域の人と触れ合える、いい場所だと思う。

【バルーンアート】
数年前、エリサが風船をひねり始めた頃、私も風船をひねり始めた。
たまにお手伝いするくらいの接し方だけど、結構好きだよ、風船。
桜の季節、ショーウィンドウを飾った桜の木。
あれがあったからほかのどんなイベントも大丈夫な気がする。

【シェアハウスはじめました】
２０１２年６月１８日、友人との３人暮らしの始まり。
演劇をやっていた頃、コロス役で一緒に大きな舞台に立った男友達。
レッツ円山で活動し始めて間もない頃、一緒にカレーを作った女友達。
縁あって一緒に住むことになりました。
男友達とバイクの置ける家を探し始め、どうせなら人を増やそうってことで女友達が参戦。
候補の家を実際に見に行こうとした不動産屋で初めてそろう3人。
内覧が終わった晩ご飯。
なんとなくこの３人ならやっていけそうだね。

【山を登る】
羊蹄山を登ることになった。
小学生の頃、クラスのみんなで登った記憶がある。
前日、ほとんど手ぶらの状態で家を出発し、ザックを買い、登山靴を買い、身支度を整えながら蘭越へ向かう。
着替えも何も持っていなかったので、最後には父親に借りて山へ。
山小屋１泊するための荷物を担ぎ、３人で登ること5時間。

雨に打たれ、霧に視界を遮られながらも、無事に山小屋到着。
のんびり寝坊した朝、霧に包まれながらも山頂をめざし、あきらめていた雲海も見れた。
あっという間に3時間で山を下りて、大人になって初めての登山終了。
麓の温泉から見上げた羊蹄山は、思った以上にでかかった。

【36歳の誕生日】
自分で作ったカレーライス。
36のキャンドルを立てて祝った。

【あとがき】
書き終えた…
まだまだ書きたいことはいっぱいあるけれど、まずは書き終えた。
「完璧を目指すよりまず終わらせろ」
そのとおり。
既に〆切から1週間経ってるけど書き終えた。

改めて36年間を振り返ってみて、自分で言うのもなんだけど、楽しい人生を送っていると思う。
「大変だね」「ツラそう」「大丈夫？」と誰かに言われることがあっても、自分でそう思ったことはほとんどない。むしろそういう言葉を投げかけられるたびに、嬉しいと思えるくらいに楽しく生きている。

平均50点あたりをあまり波打たず生きている人生よりも、0点と100点を行ったり来たりする激しい人生の方が楽しいと思う。
気になることがあれば知りたいし、やったことがないことに出会えばやってみたい。
「人生は知らないもの探し」
知らないものを見つけたらワクワクする。
知らない人に出会ったらドキドキする。
それが私の生き方、楽しみ方。
そう思ってこれからも生きていこうと思います。

この『36年刊　阿部邦彦』はまだまだ未完成です。
もしかすると来年、もっとボリュームアップした『37年刊　阿部邦彦』が

登場するかもしれません。

これをどういうきっかけで読んでいるのかはわからないけれど、最後まで読んでくださってありがとうございます。

２０１４年２月７日。
初めて姪っ子が産まれた深夜に。

阿部邦彦

36年刊　阿部邦彦

2014年3月1日　初版発行

発行：阿部邦彦

出版：らんこし作家デビュー・プロジェクト